

言葉の発達を促す指導・援助に関する実践研究

— 言葉の発達に弱さを抱えるA男の保育記録の解釈を通して —

西垣吉之¹⁾・橋村晴美¹⁾・Dalrymple 規子²⁾
 小木曾友則³⁾・西垣直子⁴⁾

A Practice Study on Instruction and Support to Promote the Development of Words: Through the Interpretation of the Childcare Record of “child A” who has the Developmental Delay of Words —

Yoshiyuki NISHIGAKI, Harumi HASHIMURA, Noriko DALRYMPLE,
 Tomonori KOGISO, and Naoko NISHIGAKI

本研究では、言葉の育ちに弱さを抱えた3歳児男児の実態とそれに対する保育者の願いや援助が丁寧に書かれた記録を取り上げ、その男児が園生活を通して言葉で自分の思いを表現するようになるまでの過程における保育者の援助のあり方について検討した。また、保育者が行う子どもの実態の捉えが、援助のあり方に深く関与していることについて明らかにした。この研究を通して、言葉の発達を促すために明らかになったことは次の通りである。①保育者との安定した関係を築くこと ②様々な体験を通して感情を揺り動かすこと ③相手に自分の思いを伝えようとする気持ちを持つこと ④子ども自身が投げかけた言葉への相手の反応を受け止めることで正しい言葉の使い方を学ぶこと ⑤園生活が充実することによりこうしたいという思いが育つこと ⑥心の動きを丁寧に言葉に置き換えてもらうこと ⑦豊かなイメージを貯える体験をすること

キーワード：言葉の発達 保育者の援助

【はじめに】

【幼児期の保育】とは子どもの特性や発達・個人差に応じ、子どもの生活や活動の姿を丁寧に読み解き、子どもが主体として生きる環境を構成し行われるものである。幼児教育や保育の質は、子どもの主体的な環境との相互性のなかで編み出される子どもの生活や活動そのものの姿に映し出される。そのため、主体として環境に関わる子どもの姿や実態を丁寧に読み解き、再び新たな援助の視点を構築し子ども自らが育つステージを整えていくことが保育においては重要になる。

つまり保育という営みは、子ども一人ひとりの抱える発達課題を的確に捉え、保育者はその課題に対する援助・配慮の具体を試み、その結果、生まれてきた子どもの実態を再び読み取る行為を繰り返しているのである。

さて、保育では子どもの実態を読み取る作業を記録を書くことで行う。ただ、子どもの実態を捉えるとき、そこには、子どもを対象化してとらえる視点だけではなく、保育者の子どもへの思いやねがいなどを書き記すことで、より子どもの実態が浮かびあがってくるものと考えている。これは子どもの育ちが子どもと保育者の関係性の変化や子ども同士の関係性

1) 教育学部 2) 中部学院大学短期大学部 3) 瑞浪市立稲津保育園 4) 岐南さくら南保育園

の変化に表れるからである。

つまり子どもの実態に加え、保育者の願いや援助のあり方が明確に書かれた記録を子どもの視点と保育者の視点から多角的に解釈すること、その絡まりを俯瞰することが、保育事象をより客観的に検証するために重要になってくると考える。今回の研究では、この考え方を土台として、保育記録の読み取りを進めていきたい。

【研究目的】

保育現場は、昨今、特別に支援を要する子ども達への対応に苦慮している現実がある。個別支援計画を作成するなどして、個に応じた関わりを試みているところである。

初めての集団生活をするA男（3歳児）は、語彙が少なく、言葉によるコミュニケーションがとりにくい。周囲の様子を感じ取りにくく、マイペースなところもある。A男の姿から担任男性保育者（以下B保育者）は人と関わる喜びを味わえるようになるとともに集団生活の中で様々な言葉を獲得してほしいという願いをもって保育をしていた。

本研究では、言葉の育ちに弱さを抱えたA男の実態とそれに対する保育者の願いや援助が丁寧に書かれた記録を取り上げた。その記録をもとに、A男が園生活を通して言葉で自分の思いを表現するようになるまでの半年あまりの過程を追いながら、その過程で保育者とどのような関係性を築いてきたのか、また、その際、保育者としてどのような援助を意識することが求められたのかについて、事例検討を通して明らかにしていきたい。

【研究方法】

B保育者から提示された時系列に沿って【エピソードとそれに対する保育者の捉え】という構成で書かれた記録を、複数の目で研究目的に応じて省察する。

- 事例1 H24年4月11日
- 事例2 H24年4月11日
- 事例3 H24年4月26日
- 事例4 H24年5月11日
- 事例5 H24年5月頃

- 事例6 H24年5月2日
- 事例7 H24年5月19日
- 事例8 H24年6月15日
- 事例9 H24年6月28日
- 事例10 H24年7月14日
- 事例11 H24年9月15日
- 事例12 H24年10月1日

＜研究の対象にした記録＞：保育歴7年目のB保育者が、A男についての実態とそれに対する保育者の読み取りと願い・援助について継続的に捉えた記録を対象として選択した。

＜B保育者について＞：B保育者は、幼児教育を短期大学で学び、その後、私立保育園で6年間勤務をした後、幼稚園と保育所の両機能を持つ公立の幼稚園に就職した。今回研究に用いた記録は、B保育者が幼稚園に就職後1年目にまとめた記録である。

＜A男が所属するクラス＞：3歳児（男児19人 女児11人 計30人）保育士4名（正職1名＝B保育者 臨時3名）のクラスのA男を抽出児とした。

＜対象児Aについて＞：A男は1月生まれの3歳児で、家族は父、母、小学生の兄の4人暮らしである。同居ではないが祖父母も近くにおり、子育てに協力的である。3歳児入園前に子育て相談を利用した経験があり、言葉の少なさや理解の弱さについて入園前に幼稚園側に伝えていた。その後数ヶ月間養護訓練センターに通所したが、入園を機に通所を止め、入園後は一度も行っていない。語彙が少ない、言葉掛けに対する理解が弱い、手や指先の不器用さ、周りの様子に気づきづらいといった点が配慮される要因となっていた。

【結果と考察】

A男の実態と保育者の関わりから読み取れること
【事例1】 A男の興味の方向性を探ろうとする保育者

「電車を通して関わる①」 4/11
砂場でスコップを使って砂を積み上げて山のようになり、小さな型はめに砂を詰めたりしていたA男。1人で静かに遊んでいた。園庭から数百メートル離れたところに線路があり、電車が通る様子を見ることができる。砂遊びをしていたA男

は、踏切の警笛が鳴る音が聞こえたようで、突然立ち上がり、フェンスの方に走っていき「でんさ(でんしゃ)だ!でんさ(でんしゃ)だ!」と叫んだ。保育者が近づき「電車だね、A男君は電車好きなの?」と話しかけると、電車を目で追いながら「うん…」と答えた。その返事は、心ここにあらずといった様子で、電車が見えなくなってもしばらく同じ方向を眺めていた。

＜保育者の捉え＞

事例1では、砂場で静かに遊んでいたA男が、突然興奮した様子で電車に興味を示し、保育者の言葉掛けに対しても、反応はするものの気持ちは電車に向けられていることが分かる。好きなものに対するA男の豹変ぶりに、保育者は驚かされながらも、これをA男との関係作りのきっかけにしたいと考えていた。

【考察1】 B保育者はこの事例において「心ここにあらず」と否定的にそのA男の姿を捉えている。一方、電車に気持ちが向かっているA男の興味の方向性を感じることができたことが分かる。それが次の事例におけるA男に対するB保育者の関わりの変容をもたらすことにつながったものと思われる。

【事例2】 A男の今に寄り添う視点と今の課題をクリアしようとする視点の狭間に立つ保育者

「電車を通して関わる②」 4/11

給食後、廊下の窓から貨物列車が見えると、A男は窓の方に駆けだしていった。保育者がA男の行動に合わせて「あ!電車だね」と声を掛けると、少しだけ笑顔になった。そのまま貨物列車を窓越しに見送り、見えなくなってからも余韻を楽しんでいる様子があった。

＜保育者の捉え＞

電車が見えなくなっても同じ方向を眺めているのは、余韻を楽しもうとしているのではないか。そのため、事例①とは異なる解釈で捉える必要があるのではないか。また、電車がA男と保育者の関係を築ききっかけになった。こうした関係性の変化を喜びながらも、一方でA男の興味の偏りに対して気になるところもあった。①

【考察2】 事例1では、A男の行動を起こした心の動きを保育者が言葉で表したことにより、A男の表情に変化が起きた。その変化は小さなものだったが、A男は自分の心の中で起きていることを代弁してくれるB保育者の存在にそれまでとは違う印象を持ったことだろう。また、B保育者自身が、A男が電車に興味を持っているという前提で関わっているために、「余韻を楽しんでいる」という表現からわかるように、A男の心の動きと自分の心の動きを重ね合わせようとしていることが分かる。そして子どもの行為に意味を見いだしている。また、事例1でA男へ関わる足がかりとして『A男の興味が向くこと』を大切にしていこうとする援助の見通しを持ったことが、事例2に表れるB保育者の関わりの変容をもたらしたと考えられる。そして、それが、結果的に新たな両者の関係性を築ききっかけの要因になった。

一方、下線部①からもわかるように、B保育者はA男の電車に対する関心を偏りとして否定的に捉えている。A男への興味・関心に気持ちを向け、それを足がかりにしていきたい思いがある一方、A男の発達課題を捉えようとしている姿から、子どもの今に寄り添う視点と、次への育ちを促していこうとする二つの視点を持って関わろうとしていることが分かる。

【事例3】 A男の根底にある不安に気づく保育者

「言葉にならない思いを読み取る①」 4/26

自由画帳にクレヨンでいくつも点を描いていたが、しばらくすると保育室の入り口付近に座り園庭を眺めだした。一度座り込んだA男は、いつまでもそうしており、その姿は保護者の迎えを静かに待っているような印象を受けた。近くに電車のおもちゃを出しても、興味は示すものの、A男は近づくことなく、また座り込み、園庭を眺めた。

＜保育者の捉え＞

事例3では、A男が家庭を離れ、いつもとは違う環境になったことで、心細さや、思い通りにいかないもどかしさをふと思いだし、園庭を眺めるということに落ち着かせようとしているのではないかと捉えた。気持ちを切り替えることができるようにと、おもちゃの電車を出してみるが、切り替えることはできずにいた。

【考察3】 A男の行為と保育者の捉えからA男が保護者から離れていることへの不安が強いのではないかと捉えている。クレヨンで点を繰り返し描く行為は、A男が不安な気持ちを紛らわせ、その不安を持ちこたえようとして行っている行為と予測できる。その後なんとかA男の気持ちを切り替えようと思い、事例1・事例2で捉えてきた【電車が好き】という特性を利用して関わろうとした。しかし、それに関わらずA男が大好きな電車のおもちゃにも興味を持ってないという姿から、保護者が迎えに来てくれるまでの不安がそれほどまでに強いことを、保育者は図らずも理解することになった。

この経験が、【A男の気持ちにより添うという保育者の関わりの変容】をさらにもたらすことになりそれが事例4に表れている。

【事例4】 A男の根底にある不安へ気づくとともにそれを確認する保育者

「言葉にならない思いを読み取ろうとする②」5/11

A男が保育室から出て、テラスに座って1人で外を眺め始めた。この直前の遊びでは、1カ所に留まることはなく、ふらふらと色々な場所で遊ぶとしており、どの遊びにも入っていくが、少しすると飽きてしまっていた。

テラスにいったA男に、保育者はすぐに声をかけるのを待って、クラスの他児が落ち着いた頃を見計らって声を掛けると、保育室に入ってくることでできた。その後、園庭を眺める場面を見かけた時には、時間を置いたり、一緒に静かに時間を過ごしたりしながら、A男の心の動きに寄り添うように心掛けた。①

＜保育者の捉え＞

事例4では、気持ちを切り替えていけるようにする手だてとして、A男の外を眺めるという行為に対する保育者の関わりを、少し時間を設けるというものにした。A男の姿を振り返ると、保護者の迎えが恋しくて泣いていた時期に、おやつの後1人で窓の外を眺めて過ごすことがあった。この時のA男は、特定の遊びをすることもなく、ただ、窓の近くにいるのだが、寂しさを紛らわせたいという気持ちと共に、電車の通過後の余韻を楽しむのと同様に、静かに自分の世界に浸るということ

も好んでいたように感じた。

A男はテラスで静かな時間を過ごし、心の安定を図っているのかもしれないと捉え、時間を置き、クラスの雰囲気も落ち着いたところで声をかけたことで、A男は安心感を持って保育室に戻ることができたと考えられる。

その後、園庭を眺める場面を見かけた時には、時間を置いたり、一緒に静かに時間を過ごしたりしながら、A男の心の動きに寄り添うように心掛けた。

【考察4】 事例3や事例4のA男の実態からA男にはA男のペースが存在することを保育者は感じはじめたと思われる。そのペースに合わせること、言葉に表れないA男の思いをくみ取りそれに応じた関わりをすることがA男との関係を築くために重要な意味があると推測したのではないか。

事例3における自由画帳に点をいくつも描くということは、事例3の考察でも述べているように、繰り返し同じ行動を取ることによって、保護者が来てくれない今の状況を持ちこたえようとする姿であり、自分の中にあるイライラや見捨てられるかも知れないとい漠然とした不安を表す姿である。同様に事例4においては、一カ所にさだまることなくふらふらすることで気持ちを紛らわせ、その場を持ちこたえようとしていると思われる。そのため、下線部①のような関わりの見通しを持ち始めたと思われる。

こうした意識の変化がどのように起こったのだろうか？ 事例3で保育者はA男の気持ちを切り替えようとA男が興味を持っていると判断した電車を利用して積極的な働きかけをしている。しかしA男はそれに応じてくれなかった。そのことによって、さらにA男の今直面している課題（保護者から離れて不安である）が明確にみえてきたものと考えられる。A男の行動の背景から読み取れる意味について捉えることによって、A男が真に要求していること、あるいは心の奥底に潜んでいるA男の言葉に表れない内面の動きを捉えようとした。そしてその時点でのB保育者の理解は、「寂しさを紛らわせたいと同時に、静かに自分の世界に浸る」ということであった。その理解が結果的にその子の今のペースに応じていこうとする気持ちへと大きく変化させていったのではないか。

この事例では、A男の表現行為と、それに対する保育者の読みとりに応じた表現行為による相互のやりとりが存在することで、保育者の関わりの視点が明確になっていくことを確認しておきたい。つまり、かかわりが仮に子どもの実態に応じていないことがあったとしても、その反応から対象児が求めていることが明確にみえてくることがあるということである。それを的確に読みとることによって、一時的に対象児にとってズレた関わりになったとしても、軌道修正する機会が与えられることになる。

【事例5】園生活全般における援助のあり方を再検討する保育者

「この頃のA男の姿」 5月頃

生活の中で、A男の体力に合わせて午睡時間の前後を延ばし、他児よりも30～40分多めにとるようにした。長時間保育を受ける頃には疲れてしまうこともあったが、午睡時間延長により降園時までにはそれほど疲れがでないようになった。結果、気持ちよく迎えを待てるようになり、帰り際に泣くこともなくなった。

給食では苦手な野菜の量を、継続して調整してきたことで少しずつ食べられるようになっていた。少量なら手が出しやすいようで、自分から野菜を食べて「A男たべた」と教えてくれた。綺麗になった皿を見せるので、保育者が「ぴかぴかだ！」などと大げさに言うと笑顔になっていた。この頃までは、朝は寂しくて泣きながら登園し、帰りは保護者の顔を見て泣き出していたA男だったが、A男は自分から「ようじえんにいく！」と言って登園してくるようになった。

＜保育者の捉え＞

登園時に良い表情になったことと、言葉の少ないA男が「ようじえんにいく！」と言えたことは、これからA男の「伝えたい」という気持ちが様々な形で表れるのではないかと期待感を持たせた。A男が自分から「ようじえんにいく！」と言って登園してきたことを保護者も嬉しそうに話しをしてくれた。朝は寂しくて泣きながら登園し、帰りは保護者の顔を見て泣き出していたA男の姿を思うと、こうした気持ちを持ってくれることはとても嬉しく思う。

【考察5】事例5からも分かるように保育者は他の生活面においてもA男のペースに合わせた関わりを試みている。とりわけ睡眠に関する生理的・身体的な欲求に応じた関わりは、A男の情緒の安定に大きく影響を与えたものと思われる。情緒的な安定があることで、A男は周囲のことへの関心を持つことができるようになったものと思われる。

生活全体における見直しができたのは、保育者の中に、A男が抱えている課題に対するはっきりとした確信、つまり、精神面でA男に寄りそうのみでなく生活面においても、“いま”のその子のペースに応じて行くことが次への育ちを保障することへの確信が生まれてきたからではないか。また、そうした関わりによって、幼稚園に行きたいという心の変化をA男にもたらしたことが保育者にとっては大きな喜びとなったにちがいない。

【事例6】生活の場の安定によってもたらされる周りの事象への関心が生まれる

「他者とやりとりをする面白さに触れる」 5/2

他児が保育者と父親を間違えて「パパ」と言ったときに、言葉のやりとりをする遊びが生まれ、保育者と他児が「…パパじゃない」「パパ?」「…パパじゃない」と言って楽しんでいた。周りの子ども達も保育者に「パパ?」と言って、保育者が「パパじゃない!」と答えるという遊びをしばらく行っていた。その様子を見ていたA男が、他児の真似をして「パパ!」と言ってきた。保育者が「パパじゃない!」と答えながら、声色や表情を変えていった。A男は「パパ」と言った後「パパじゃない」と返す保育者の声を聞く度、大笑いしていた。

＜保育者の捉え＞

事例6で、他児が味わった遊びの面白さは、本当は「パパ」と呼ぶべき人ではない相手に「パパ」と呼ぶことで返ってくる「パパじゃない」という反応で、保育者がパパではないということが分かっているから楽しいのである。しかしA男にとっては、声を掛ける度に保育者が様々な反応することが面白かったようである。A男は単純に反応を楽しんだが、人と関わろうとする基盤を築く上で、「なんだか楽しいな」という思いを持つこ

とは大切である。人と関わりたいという気持ちが保育者や友達からの刺激を受け育ち始めたように思う。

【考察6】事例6を通して、それまでは、保育者からの関わりが多かったのだが、保育者に自らかわることが「なんだか楽しいな」という思いをA男が持ち始めたことがわかる。その背景には、自分の気持ちが向く対象を分かってくれる保育者の存在や、自分のペースに応じて対応してくれる保育者のそれまでの関わりが存在する。そのことによって保育者に自分から関わりたいという気持ちが育ち始めたのである。

A男はこの時、「パパじゃない」という保育者の言葉を自分に対する否定的な意味とは捉えず、自分との関わりを楽しもうとする肯定的なニュアンスを含む言葉として捉えていたものと思われる。こうした意味では【言外の意味】を感じられるようになった育ちを捉えることができる。また、保育者との関係が安定することによって、周りの子ども達と保育者との目に見えるやりとり（「パパ？」—「パパじゃない」）と、そのやりとりから感じられる楽しさに誘われるかのように、自らも保育者に「パパ？」と話しかけてきた。そして実際友達の行為を真似ることで、実際に自分の感情が心地よく動く経験をするようになった。まだ、他児の心の動きや保育者の心の機微などに対する明確な読みとりはできていないだろうと予測されるが、他者へ自分が関わりを持つことが「なんだか楽しい結果を生むことがある」という実感は持てたとと思われる。

この事例では集団保育において子どもが育つ基盤にあるものは、保育者との関係性であり、その関係性が成立することによって、周りの子どもへの関心へとつながっていくという発達理解を捉えている。

またこの事例は、言葉が自然な状態で発せられる基盤は、本人が楽しいと思える体験、心が動く体験であることを物語っている。保育者が自分の深い思いに気づいてくれていることを実感すること、それによってもたらされる情緒の安定、安定することによってもたらされる周りへ向けられるまなざし、その時の心地よい感情の動きが、結果的に言葉を発するエネルギーを培っているのである。

【事例7】怒りが出せるようになった関係性の築き

「言葉を使えないもどかしさを味わう」 5/19

キャリアカーのおもちゃを他児が使っている時に、A男が何も言わずにキャリアカーに手を伸ばして取ってしまった。他児が怒ったが、同時にA男も怒り、他児に「だめ！」とか「いや！」などと叫んでいた。他児はその勢いに押されそうになり戸惑った顔をしていた。

保育者が他児にキャリアカーを返そうと近づくと、A男は保育者にも怒って「だめ！」といいながら叩こうとした。保育者がA男に対して「A男君使いたかったんだね？友達を取られると思って怒ったんだよ」「友達が使っているから取らないであげて」と話したが、興奮している状態であることと、こうした言葉掛けが理解しづらいA男にとっては、ただ不快になっただけだったようだ。

＜保育者の捉え＞

事例7から、A男が他児からおもちゃを手に入れるための手だてが少ないことがよく分かる。「貸して」「いいよ」というやりとりがある中でそれを使えないために無言で取りにいってしまう。また相手の怒りに合わせて真似するように怒りだし、保育者にも手を出そうとするほど興奮してしまい、気持ちを納められなくなってしまった。言葉が少ないが故に自分の思いを満たせないでいる苛立ちや不満が怒りをさらに激しいものにしていくと考えられる。

保育者からの言葉掛けも、わかりやすい言葉を選んでも理解できないことの方が多く、A男が納得した解決に至らないことがしばしばあった。そのため、すぐに気持ちを切り替えられるような関わりを心掛けていた。ただ、この関わりはいずれ他児が育ってくることでバランスを崩すのではないかと危機感も持っていた。

【考察7】事例7では、A男が素直な感情を他者との間で出し始めたと言うことがわかる。他児に対して「ダメ！」「いや！」と強く主張できるようになったのは、自分の意志を通そうとする育ちの裏返しとして捉えることができる。保育者とのそれまでの関係性において、事例2から事例5までのような受容的、共感的な関わりがあった結果として生まれてき

た姿である。

とりわけ保育者との関係性においては、「怒り」が生まれてきた。A男からすれば、これまでの保育者は自分の気持ちを受け止めてくれる存在であったが、他児の気持ちを代弁してA男に語ったり、A男の行動を制御しようとし始めたことは、A男の目には新鮮に映ったに違いない。しかし、それを受け止める余裕がA男にはなかったのである。そのため、受け入れてくれない保育者に対して怒りという強い感情が生まれてきた。それは裏返せば保育者との絆が非常に強く形成されてきた表れでもある。つまり怒りを出せるようになったのは、自分の“いま”の感情を素直にそのまま出せる関係性の成立が背景にはあると考える。どんなことをしても否定されない自分を感じ始めているのである。

一方、この事例は、保育者としてはそうした他者の気持ちの動きへの気づきの弱さを抱えるA男に対する新たな課題に直面する機会になった。その課題が下線部に表現されている。事例6までは順調な育ちの姿をA男の姿から読みとることができる。事例7も、A男の自然な発達の道筋の延長線ではあるが、保育者はそのように捉えられなかったがために、再びB保育者にA男に対する焦りが生まれてきたと考えられる。

【事例8】保育者が同じ心の動かし方をしていることを感じ始めるA男

「達成感を味わう経験」 6/15

音楽療法に参加した。A男を含め三名での参加だったが、初回ということもあり、A男はとても緊張している様子だった。この時期のA男は様々な活動に期待感を持って参加できるため、その気持ちをうまく引き出していけるかが最初の支援のポイントだと考えていた。

保育者がそばに付き添いながらプログラムを進めていったが、歌に合わせて太鼓を鳴らすという場面で、太鼓の音を聞いたA男が、ぱっと目を輝かせ、保育者の方を見た。保育者も「いい音がしたね」と声をかけつつA男の気持ちに共感していった。これで意欲が出たのか、その後は集中して話をきいており、1つ1つのプログラムを終える度に良い表情をしており、全てが終わった時に

は、満足そうな表情をしていた。

＜保育者の捉え＞

事例8では、A男の目が輝き、保育者に視線を送った。こうした「共感してほしい」という思いを表現できるようになったことが言葉を増やすきっかけになると考えられる。また、この場面でA男が意欲や興味を持ったと感じた保育者は、側で温かく見守るように心がけた。音楽療法での最も大きな成果は、集中して話を聞くことで、実際にやってみたときには楽しいという気持ちを十分味わうことができている、活動を終えて、達成感を感じていたことだった。保育者は、この「活動の趣旨や説明が分かり、理解した上で取り組み、できたという実感を味わう。」という経験の繰り返しでA男の達成感、自信につながり、成長に大きく関わってくると考えた。また、A男はクラスの中では気になる姿も多く、育ちもゆっくりだと捉えているが、この小集団の中で見せるA男の姿から、保育者の向ける眼差しがより肯定的なものへと変わっていった。これは、A男にとっても、保育者にとっても、集団の中で生活していくためにプラスに働く意識の変化だった。

【考察8】この保育者も捉えているように、A男にとっては、自分の心の中でおきていることに対して保育者にも共感してほしいという心の動きを感じることができる。A男の中に共感してほしいという気持ちが起きてきたのは、保育者が自分と同じ心の動かし方をしていることを実感し始めているからである。この気持ちの動かし方は自分の気持ちを他者に伝えたという原動力になる。そして言葉というツールを利用することで他者に何かを伝えることを実現させようとする。結果的に言葉で表現する力を育むことにつながるものと思われる。

また、この保育者が捉えているように、固定化したその子への見方を変えるために、同一集団ではない場でA男の姿を捉えることで、今まで気づかなかったA男の姿に触れることができる。それが、子どもへの肯定的な見方に向かうためのきっかけになったものとする。

【事例9】心を動かす体験を積み重ねる

「イメージを言葉で表す」 6/28

寒天遊びを行った。寒天の感触をととても喜んでおり、水色の寒天を手で細かくつぶして、コップの中に詰め込んでいた。最後には盛り上がるほどにして「せんせい！ジュースゼリー」と教えてくれた。

＜保育者の捉え＞

事例9から、A男が感触遊びの中でイメージを膨らませながら楽しむ様子が伝わると共に、保育者に向けて、言葉で自分のイメージを伝えることができていた。A男にとっては自分の思っているものや考えを言葉で伝えることは大変なことだが、「ゼリー」「ジュース」といった身近な言葉を組み合わせることで表現した。保育者はこうした言葉を拾い上げながら、簡単な会話のやりとりに結びつけるようにしていった。

【考察9】この遊びでは、五感、特にここでは触覚と視覚を通して、寒天を体感するプロセスが存在する。そこで体感とイメージの世界とが結びつくことによって、「ジュースゼリー」という言葉が生まれる。触覚や視覚は体感であり、その体感は直接的に心や気持ちを動かすことにつながる。心や気持ちを動かすことが、結果的に言葉を生み、それが事例8で確認された他者に伝えたいという気持ちの育ちと重なり、「せんせい！ジュースゼリー」と言葉で伝えることになったものと考えられる。

【事例10】心に抱く強い意志が言葉を生む

「友達との関わりで味わう思い」 7/14

水道で手を洗う場面で、A男が他児に噛みついてしまった。原因は他児が、手を洗っているA男を何度も押してしまったことにあるようだった。手が使えないA男は何度も「やめて」と言ったのだが聞き入れられずに噛みついてしまった。保育者が話をしていくが、2人は何がいけないのか分からなかったようで、A男は「(友達が)おした」といい、他児は「A男くん、かんだ」といい、それ以上は分からないようだったため、痛かったという気持ちを受け止めた上で、互いに押さない、

噛みつかないと話をしていた。

＜保育者の捉え＞

事例10について、保護者に降園時に噛みついてしまったことを伝えると、A男は、最近は家庭で兄弟の中でも噛みつくことはほぼなくなったということだった。ただ、時々怒ってものをなげてしまうことは見られるようで、その時には厳しく注意されるとのことだった。

噛みついてしまったということは、A男に余程の思いがあったのだということを伝えると共に、友達とのトラブルが出てきた背景には、A男と友達の関係が、お互いを気になる存在として捉え始めたという育ちがあるということも伝えた。友達に興味を持ち始めたことを理解してもらい、A男が成長してきており、その中で味わう壁の1つが言葉で思いが伝えきれずにもどかしくなり噛みつくという行為になったということ話を話していった。保育者は、A男が噛みついたという事実に関しては注意を払わなければならない。噛みつきまでに至る前にA男の気持ちは言葉で代弁していくことで収まったかも知れない。友達と関わる楽しさと難しさを味わうためには、保育者の配慮が必要であると思った。

【考察10】A男が、自分はこうしたいという思いが強くなるようになったことがよく伝わってくる事例である。「やめて」という言葉は、自分の強い意志を表す言葉である。噛みつくということは、行為としては否定されるべきことかもしれないが、それほどまでに自分の意志を表現し、自分の行為を貫こうとした気持ちの育ちを読みとることができる。言葉を発する背景には、必要にせまられて自ら発するというプロセスがある。「やめて」という言葉は、自分の意志によってしようと思っていることを阻止されることに対する強い反発である。一連の時間経過を通して、A男には「自分はこうしたい」という自我の育ちを確認することができる。

この事例で保育者はA男の気持ちを受け止めた上で、互いに押さない、噛みつかないということを伝えている。そうした丁寧な関わりを繰り返すことによって、いずれは言葉を介してお互いの気持ちを分かり合う育ちを促す大切な関わりをしていると言える。

さて、家庭ではかみつきが収まってきたが、一方、“時々怒って物を投げてしまう”という表記からも分かるように、より身近な存在の人（家族）に対してA男は、自我をそのまま出していたことが読み取れる。しかし、園のA男の周りにいる子ども達には、今までそうした姿を現したことはなかった。だからこそ、この嘸みつきにはA男にとっても、周りの子どもたちにとっても大きな意味があり、新たな転換点だと考えられる。確かに、この保育者が解釈するように、言葉で思いが伝えきれずもどかしくて嘸みつくという否定的な捉え方もできるが、それ以上に、嘸みつくと言う行為によって自分のこうしたという思いを表出したことが、これからの成長を予感させている。そして、これから、何度も自分はこうしたという思いを出し、他児とぶつかり合う体験を繰り返すことで、互いの強い思いを少しずつ譲り合うことが心地よいと思える体験を積み重ね、人と関わるスキルを作っていく時期に入ったと捉えたい。

【事例11】 こだわりを育ちとして受け止める／見通し しが生まれることが言葉を生む

「運動会に参加する」 9/15

運動会では、観客席にいる保護者を見つけると、涙目になっていたA男だったが、クラスの流れて一生懸命ついて行こうとする姿が見られ、普段の姿を見せることができたと感じた。競技の中で、手に持った器に、画用紙で作ったラーメン、チャーシュー、ネギ等を乗せて走って届けるという場面があった。A男が器に盛りつける際、ネギが机からいくつか地面にこぼれ落ちてしまった。ネギはたくさんあり、落としても気にすることなく急いで作っていく子ども達がいる中で、A男は地面に落ちたネギを1つずつ拾い始めた。保育者も手伝い、拾い終えたA男はようやくゴールに向かった。A男らしいこだわりを見せた場面だった。競技終了後、保育者が「A男君、ネギ拾えて良かったね」と言う「うん！」と嬉しそうに頷いていた。

＜保育者の捉え＞

事例11から、保護者の元に駆け出すことなく、クラスの活動に参加できたことは、保護者にとっては嬉しいことだったようである。A男には、寂

しさを感じながらも保育者や友達の中でやるべきことが分かってできたということがとても素晴らしいことだと保育者が意味付けをしていった。また、マイペースではあったが、競技中でA男が頑張った部分を認めていくことで、自己肯定感を高めていくことに繋がると考えた。

保護者とは、運動会で演技、競技だけでなく、出番以外のテントにいる時や、クラスで動いている時等で、困ったことがあれば保育者に声を掛けることができれば良いという話をしていった。この時期A男が育ってきた一面であり、困ったことを言葉で伝えられるようになるという育ちが、普段とは違う場面でも変わらず出せることを願っていた。こうした姿も何度かあり、保護者と保育者とA男の育ちを喜び合うことができた。

【考察11】 運動会のラーメン作りでみせたA男のこだわりにも、「自分は！」という自我の育ちを読み取ることができる。A男は保育者の受容・共感を核とした関わりによって、運動会という緊張を強いられる場面においても、安心して自分がしたいことをやり遂げることができたものとする。この事例の保育者の捉えにも書かれているように、保育者との関わり合いの中で形成された園で生活することへの安心感によって、「困ったことがあっても保育者に訴えることによって何とかなる」というつながりがみえてきたのと思われる。つながりがみえるとは、見通しを持つことである。見通しが持てるようになるからこそ、困ったことになるかもしれないと未来をイメージすることができる。困ったことがイメージできその時の不快な心の動きを想像できるからこそ、困っていることを言葉に置き換えて表現できるようになったと考えられる。

【事例12】 今後への見通し

「周囲の子ども達との遊びにおけるズレ」 10/1

戸外で警察と泥棒に分かれて鬼ごっこをした。単純に鬼ごっこの鬼が警察、逃げる側が泥棒というものだが、子ども達は、警察になれば保育者の合図で敬礼をしたり、泥棒が警察をからかったりするという場面もあり、なりきって遊ぶ楽しさもあった。この遊びを見たA男が途中から入ってき

た。A男は何も言わずにその場に加わろうとしていたため、保育者に「いれては？」と声を掛けられると、恥ずかしがりながらも保育者を見ながら「いれて」と言って参加することができた。入ったものの、「警察は黄色の帽子にしてね、泥棒は赤色帽子だよ」という指示や、追う側、逃げる側も分からなかったようで帽子をかぶれずに困っていた。保育者のなっている役にA男を連れて行き、一緒に走って逃げたり、追いかけていたりしていた。A男は走り回ることが楽しいようで、笑いながら走っていた。

＜保育者の捉え＞

事例12では、クラス子ども達とA男との間で、遊びの楽しさの共有が難しくなってきたことを感じる場面だった。ここでは保育者が遊びとA男をつなぐ役割を果たしている。保育者は、A男が遊びを見て「楽しそう」と感じたからこそ参加しようとしたのだと思い、この遊びの楽しさを味わえるように援助していくことにした。しかし、警察-泥棒、あるいは追う-追われるという役割が分からなかったA男にとって、このルールを知り、理解して遊んでいくことに楽しさは感じられないと気付く。そこで保育者と一緒に遊びに参加しながら、保育者や友達の様子、役になりきったときの言葉や表情の変化を見せながら、楽しい雰囲気を味わえるようにしていった。ルールを理解できないでいることで、周囲の子ども達から「今タッチしたよ！」と言われたり、彼らの感じている楽しさには気付けずじまりするA男。周囲も育ってきたことで、A男との関わりに、保育者の支援が、気持ちの代弁とはまた違う形で必要になってきた。

【考察12】自分の感じたことをアウトプットすることは、自分の感情の動きに根ざしたものである。A男は自分の感情の動きを表現する力は少しずつついてきたことが、今までの事例解釈から読み取れた。この事例でも、周りの子どもたちがしていることは何となく楽しそうという気持ちがA男にわき起こり、仲間に入ろうとしている。しかし、それは、単に雰囲気を感じているのであって、その鬼ごっこの「追う-追われる」面白さを感じているわけではない。しかし、遊びにおけるルールの理解のためには、

意味の理解が不可欠になってくる。意味の理解には、言葉が不可欠の要素となる。言葉が存在するからこそ、その言葉によって、行動をコントロールすることができる。言葉が存在するから、こうなったらこうするというルールに自分を合わせて行くことができるようになる。つまり、見通しを持って行動ができるようになるためにも、言葉による意味理解が今後重要になってくることが読みとれる。

【ま と め】

A男の変容から読み取れた内容を元に、発語を促し、コミュニケーションの手立てとして言葉を利用できるようになる過程についてまとめる。

- ① 保育者との安定した関係性が、子どもが安心して自分を表現することの土台にあることがわかった。自分の感じた世界を表す手立ては、言葉に限らず子どもの表情であったり、行動であったり様々であるが、それらすべてに意味があるという前提に立ち、その意味を読み取ることが保育者には求められる。子どもの表現行為の的確な意味理解が行われることで、子どもは自分の気持ちを受け止められたことを実感し、自らの意志によって言葉を発しようとする。
- ② 子どもは様々な体験を通して自分の感情が揺り動かされることにより、それを周りにいる他者に伝えようとする気持ちが生まれることがわかった。そしてその言葉に耳を傾けてもらえる体験が次に相手に共感してもらいたという気持ちを育むことになる。そしてますます相手に自分が感じたことを伝えたいという意欲が増す。そして、言葉に置き換える体験を積み重ねることで、語彙が増えていくことになるものと考えられる。
- ③ 子どもは自分の思っていることを相手に伝えようとすることで、自分自身がどのような気持ちを動かしていたのかを確認することができることがわかった。言葉を発することで、自分の考えをまとめていくことができると考えられる。
- ④ 子どもは言葉を相手に向けて発し、その結果、相手から返ってくる様々な反応を受け止めながら、言葉の正しい使い方を学んでいくことがわかった。
- ⑤ 園での生活が充実し、自分がこうしたいという

思いが強くなっていくことによって、子どもはその気持ちを現実の行動に移すために必要だと思われる言葉を使い始めようとするのがわかった。

- ⑥ 言葉で表現できない場合、子どもは自分の感情の動きが整理できず、イライラしたり不機嫌になることが予測できる。その際はなるべく子どもの心の動きを丁寧に言葉に置き換えていくことによって、子ども自身が自分の心の状態を整理するきっかけを作っていくことが保育者の重要な役割の一つとしてあることを把握できた。
- ⑦ 子どもは様々な体験を漠然としたイメージとして貯えていく。活動が充実することはそのイメージをさらに貯えることになる。そうした蓄えがあることで、時期を経て同じような場面にであつときに、そのイメージが想起され、それが言葉の発語につながるものが予測できた。

【今後の課題】

B保育者が事例12でも捉えているように、A男は言葉の理解については弱さを抱えている。言葉の意味の理解の弱さが今後A男と他児との順調な関係を結ぶことに不具合があることをB保育者は予測している。言葉の理解を促す援助・配慮について、今後研究を進めていくことが重要と考える。

引用文献

- 『保育・支援の場における音・音楽の持つ意味に関する考察—主体としての【音】【音楽】という観点から—』西垣吉之 脇田和子 岡田泰子 西垣直子 ダーリンプル規子 名和孝浩 発達障害支援研究13号 2014
- 『保育実践から読み取る「主体」という言葉を巡る意味に関する考察』西垣吉之 西垣直子 岡田泰子 病児保育岐阜第14号 2013
- 『保育記録を素材にした保育の質の高まりに関する研究—話し合いの困難性や記録の質に着目して—』西垣吉之 西垣直子 鈴木公二 発達障害支援研究第12号 2013
- 『子ども未来セミナーⅧ あらためて幼児教育・保育の本質を問う 質の高い幼児教育・保育とは何か?—』西垣吉之 中部学院大学・中部学
- 院大学短期大学部 子ども未来セミナーⅧ趣旨説明より
- 『子どもが自分の感情を上手に調整するまでのプロセスに関する研究』西垣吉之 西垣直子 寺見陽子 他 発達障害支援研究第10号 2012
- 『保育における関わりの質に関する研究Ⅱ—立場の異なる複数の人が捉えたその子像を基盤にすえ解釈するという視点から—』西垣吉之 西垣直子 日本保育学会第65回大会発表要旨集
- 『保育者の指導・援助に関する研究—子どもと保育者の関係性によって育まれる育ち合う関係について—』西垣吉之 鈴木広二 西垣直子 日本保育学会第63回大会発表要旨集 2011
- 『低年齢時期における共有感覚の創造に関する考察Ⅱ—言葉を通して—』西垣吉之 西垣直子 馬場佑真 日本保育学会第63回大会発表要旨集 2011
- してもらった体験による心地よさの形成の意義 中部学院大学・中部学院大学短期大学部紀要 中部学院大学・中部学院大学短期大学部紀要 第12号
- 身体の動きを生み出す保育環境を構成する保育者の役割について 西垣吉之 馬場佑真 西垣直子 日本保育学会第62回大会発表要旨集 2010
- 『保育・親支援における受容と非受容の意味に関する考察—かみつきが続くA子と保育者の関係性の変容過程を追いながら—』西垣吉之・西垣直子・山田陽子・寺見陽子 中部学院大学中部学院大学短期大学部 研究紀要 第8号 2007
- 『幼児の心の理解を進める保育者養成のあり方について—幼稚園・保育所(園)における指導上「気になる子ども」に関する調査—』伊藤祐子・別府悦子・西垣吉之・岡田泰子 日本私学振興財団助成研究報告書 全49頁
- 『幼稚園教育要領解説』文部科学省 フレーベル館 2008
- 『保育所保育指針解説』厚生労働省 フレーベル館 2008
- 『保育の質を高める』大宮勇雄 ひとなる書房 2006

(2015年12月18日 受稿)